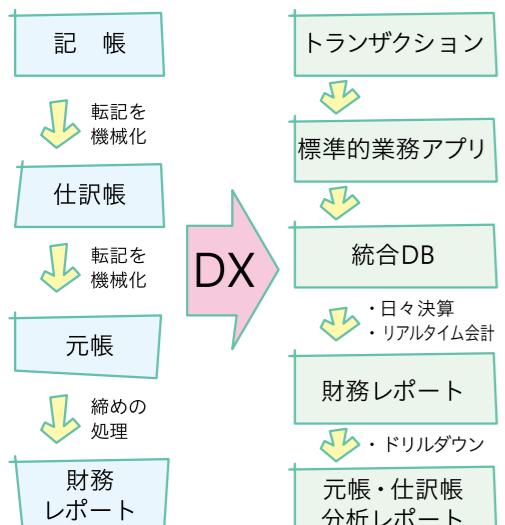


法たつたわけです。この流れに沿ってシステム化することは決して間違いではありませんが、一つ一つ締めをして、転記集計するという方法ですから、締めを待たないとレポートはできません。

私たちは、1990年代末のER Pの登場によつて外部からのデータこれをトランザクションといいますが、これを受け取ると、転記ではなく、アプリケーションが直接、統合データベースを更新するというデジタルならではの方法を知りました。たとえば、ネットから注文を受けると在庫データを引き当てて更新し、また、製造手配や外注手配すると同



図：業務の見直し ～アナログ的デジタル化から真のデジタル化へ

そのためにはどうすればいいでしょうか。まず、会社の業務の流れの見直しです。ほとんどの会社はIT化するときに今までの仕事をもとにシステム化しました。従来の実務は紙ベース、いいかえると伝票が発生するとそれを記帳し、日計表、仕訳帳勘定元帳を経て貸借対照表、損益計算書、キャッシュフロー計算書などの財務レポート、さらに原価明細書を作成します。しかし、これらは転記という簿記会計がベースになっています。転記することは、確認しながら間違いない集計ができるようという知恵でもあったわけで、表計算ですぐできる縦横集計も間違いを減らす手法だつたわけです。この流れに沿ってシステム化することは決して間違

しかし数字にすればすべてOKといふわけにはいきません。測定機器の精度や機能に制約されます。測定環境も知つておかないと、大きな誤解を生じます。雨量100ミリは、100ミリリットルではなく100ミリメーターであって、シリンドーにたまつた水の高さを測定しています。万歩計で1万歩というのは、加速度センサーが上下した回数を測つているのであって、歩数自体を図つているのではありません。さらに消費力ロリーが表示されてもそれは、歩数

このよんが憲華を送くまで付ける
技術、それが無線通信技術の発達、
例えばモールス信号です。もちろん
戦国時代も、それ以前も、火を焚い
て煙を上げて、情報を伝えていまし
たが、情報量が少ないし、デジタルと
は言えません。大量の数字を正確に
送るために、「ある」と「ない」という
よう、「0」と「1」の2進数で送る
ようになりました。この最大の利点
は、通信中に、ノイズが入つて信号
が正しく伝送されなくなつた場合で
も、「ある」か「ない」の2つだけです
から、元のデータに復元することが
比較的容易なのです。昔のビデオテ
ープやカセットテープはダビングすれ
ばするほど音声や画像が悪くなつて

DXってなに



日本のIT化、デジタル化が遅れているので、デジタルトランスフォーメーションつまりDXが必要だといふ声が日増しに大きくなっています。字句通りに解釈すれば、フォーム、つまり形を、トランスフォーム、つまり変えることです。でもトランスにはエンジとは違う意味があります。転じる、移る、つまりある状態から、別の状態に変わることのようです。さらに横断して、超えてという意味もあるようですから、組織をデジタルデータが横断して価値を高めることも意味しているのです。まさしく、バラバラになつてゐる組織や業務を、デジタルデータを使つてつなぐことにあるのかもしれません。

すでにパソコンもスマホもインターネット

各々のデータが人の介在なく、つながっているとは言えません。ワープロで文書を作成し、印刷して確認してファックスで送るということは、デジタルとデジタルをアナログでつないでいるのです。もちろん、出来上がったものが正しいかどうか確認してから、次の工程にまわすという業務は、必ずしも悪いことではありませんが、人手がかかり、時間がかかりますが、DXの目指すところは、デジタル化によって企業や社会を改革することです。でも、わが社はどうしたらよいのでしょうか。一言でいうならば、企業経営の自動化、私はそれを高山祭の「からくり人形」に倣って、経営の「からくりつくり」といつまでもす。もちろん、自動化したら社員はいらなくなるのではという疑問もあるかもしれません、人がいなくても人形が仕事をしてくれる、素晴らしい「からくり人形」を作るのは経験豊富な職人技です。人がいなくて「からくり人形」は完成しません。社員を生かすため、働きやすくするため、会社の売り上げと利益を上げ、給料を上げるための自動化こそDXです。

時に生産計画データを更新します。製造し終わったら、納入の手配をして、配送業者に集荷依頼が送られます。

納入が完了し、検収が済むと、棚卸資産が売掛金に移され、損益計算書の売上高と売上原価が計上されます。同時に発注企業では、固定資産と買掛け金が計上されます。転記でなく同時更新です。

これで月次、日次、リアルタイム会計が可能になりました。そこからさまざまな報告書作成や分析を行います。詳細なデータが必要な時は、元のトランザクションデータに遡つて



しぶしぶ、中小企業の生産性がいいといわれますが、社内よりも企業間でのやり取りの無駄のほうが多いです。それが中小企業にしわ寄せしていることが問題なのです。企業間がつながり自動化されれば、省力化だけでなく、迅速な処理が可能になります。入金も短縮され、間違いなく中小企業の生産性が向上し、サプライチェーン、さらに日本全体での大きさの観点から、ある資産がどちらの企業にも計上されない期間があるということは、あつてはならないことなのです。

技術、それが無線通信技術の発達、例えばモールス信号です。もちろん、戦国時代も、それ以前も、火を焚いて煙を上げて、情報を伝えていましたが、情報量が少ないし、デジタルとは言えません。大量の数字を正確に送るために、「ある」と「ない」というように、「0」と「1」の2進数で送るようになりました。この最大の利点は、通信中に、ノイズが入つて信号が正しく伝送されなくなつた場合でも、「ある」か「ない」の2つだけですから、元のデータに復元することができます。昔のビデオテープやカセットテープはダビングすればするほど音声や画像が悪くなつてきますが、DVDなら劣化しないのです。

デジタル化ではなく、
デジタルを主体とする
業務の流れへと変える
のです。

時に生産計画データを更新します。製造し終わつたら、納入の手配をして、配送業者に集荷依頼が送られます。納入が完了し、検収が済むと、棚卸資産が売掛金に移され、損益計算書の売上高と売上原価が計上されます。同時に発注企業では、固定資産と買掛金が計上されます。転記でなく同時更新です。これで月次、日次、リアルタイム会計が可能になりました。そこからさまざまな報告書作成や分析を行います。詳細なデータが必要な時は、元のトランザクションデータに遡つて

技術、それが無線通信技術の発達、例えばモールス信号です。もちろん、戦国時代も、それ以前も、火を焚いて煙を上げて、情報を伝えていましたが、情報量が少ないし、デジタルとは言えません。大量の数字を正確に送るために、「ある」と「ない」というように、「0」と「1」の2進数で送るようになりました。この最大の利点は、通信中に、ノイズが入つて信号が正しく伝送されなくなつた場合でも、「ある」か「ない」の2つだけですから、元のデータに復元することができます。昔のビデオテープやカセットテープはダビングすればするほど音声や画像が悪くなつてきますが、DVDなら劣化しないのです。

て、決して消費したエネルギーを測定しているのではありません。数字は客観的であると思われ、独り歩きします。その数字を用いる関係者すべてが、測定の状況を十分理解しておかないと、失敗をしてしまいます。

がつてゐるとは言えません。ワープロで文書を作成し、印刷して確認してファックスで送るということは、デジタルとデジタルをアナログでつないでいるのです。もちろん、出来上がりたものが正しいかどうか確認し

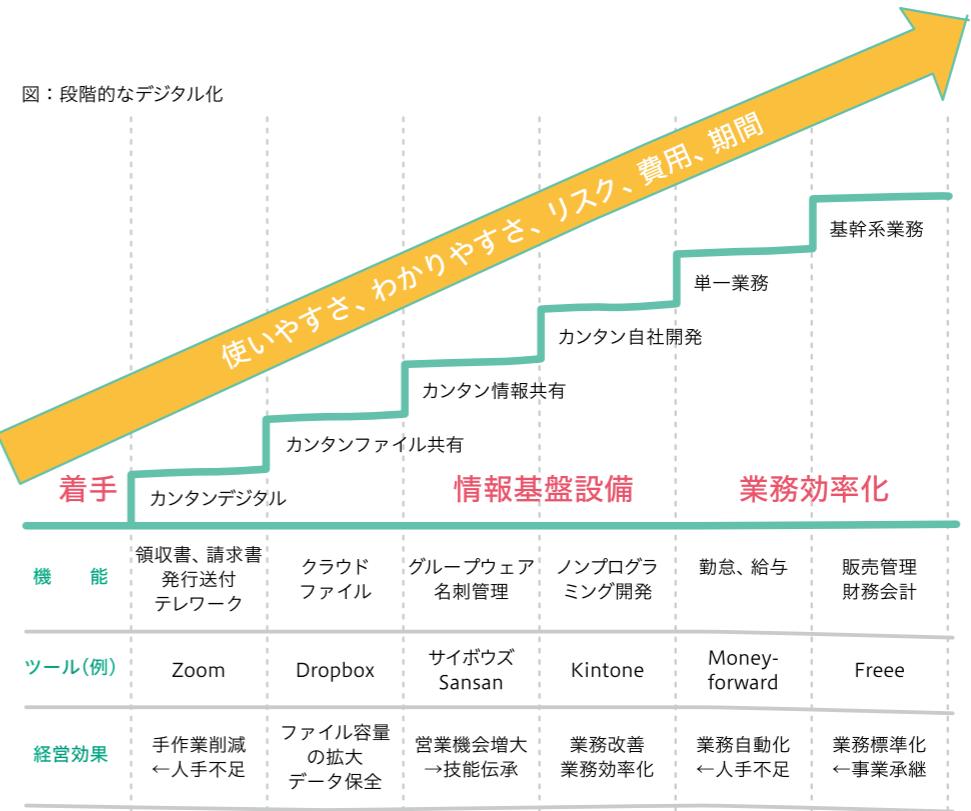
中小企業は
何をどうすれば
いいのでしょうか?

広告を見ると、DXをすぐに導入
しないといけないようと思えてしま

います。しかし運転免許がないのに、
クルマを買っても仕方がないように、
まずデジタルを活用できる環境や能
力を育てないといけません。簡単な
デジタルツールを使って体験するこ
と、これが着手です。

あります。

名刺管理アプリを全社で導入す
れば、当然、後からもらった名刺に更
新されるので、社員みんなが同じ最
新の名刺を持っているようなもので
す。だれがいつもらつたかの情報が
付いているので、社内での情報の共
有が進みます。



インターネット環境
で簡単に打合せができることが経験できました。でも印鑑を押すためだけに会社に行くのだったら、捺印をなくすと改善を真剣に考えるようになります。営業マンが売り込みに来て見られるからいいたいといつても、ネットで見るからいよいと言えば、ホームページも改善されます。大きな生産性向上です。

会社の文書もメールで添付するよりも、共通のサーバーに保存されていれば、自分の会社に行かなくても、いつでも文書を検索し、作成できます。これが情報共有です。

Zoomを使えば、インターネット環境で簡単に打合せができることが経験できました。でも印鑑を押すためだけに会社に行くのだったら、捺印をなくすと改善を真剣に考えるようになります。営業マンが売り込みに来て見られるからいいたいといつても、ネットで見るからいよいと言えば、ホームページも改善されます。大きな生産性向上です。

次はプログラムを作らずにテンプレートや設定だけで簡単なシステムを作つてみることです。顧客データ管理、取引先管理、受注管理、社内SNSなどです。どんなデータがどのように使えるか、改善活動につながります。

そして業務への本格利用です。まずは給与計算、勤怠管理などです。スマホを使ったクラウドアプリがたくさんあります。そして会計業務でスマートフォンを使つて銀行口座と連携でき、領収書をスマホで読み込めば自動記帳、自動仕訳ができます。つまり、記帳しなくとも自動的に損益計算書、貸借対照表が作成できるようになりました。ここで大事なことは社内だけでなく、社外からのデータに自動的につながるようになることです。注文はネットから受信しそのまま受注ファイルに書き込まれ、在庫も検索して引当て、出庫まで自動的にできるようになります。まさ

にDXによる業務の変革です。
道具だけで経営が改善するわけはありませんし、明日からすぐにできるわけではありません。小さくともうまくいくことを体验して、段階を踏んで会社の業務を変えるのです。
それが皆さんの会社にあつた身の丈DXというものです。まずは社内の雰囲気づくり、そして何より成長の分かれ道は、デジタル化に向きます。だからこそ、DXを導入することで、社内人材を育てることです。

さあ、着手は、今です。

